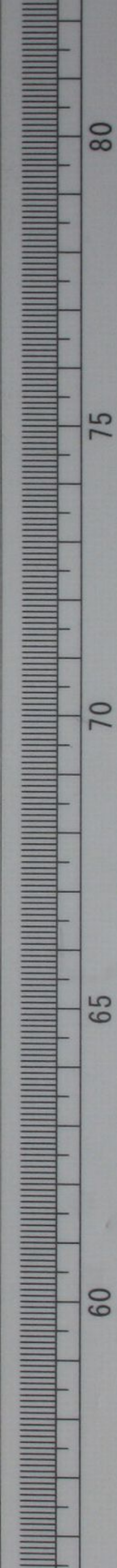




芭蕉句選  
下

中村俊定文庫  
文庫 18  
248  
2







焠之部



酒弘集は白

杉凡

みこのしん

初秋やききこぬらけの夜  
七夕や秋夜にあらば  
たありにのしん

徳合

文月やふりまき夜よの

いへも夜よ様かまの川

合歡の木は葉よりかまの

さるおよひまも旅の

いさよ北枝よりかまの

いさよ北枝よりかまの





Handwritten text at the top of the page.

Handwritten text line 1.

Handwritten text line 2.

Handwritten text line 3.

Handwritten text line 4.

Handwritten text line 5.

Handwritten text line 6.

Handwritten text line 7.

Handwritten text line 8.

Handwritten text line 9.

Handwritten text line 10.

Handwritten text line 11.

Handwritten text line 12.

Handwritten text line 13.

Handwritten text line 14.

Handwritten text line 15.

Handwritten text line 16.

Handwritten text line 17.

Handwritten text line 18.

Handwritten text line 19.

Handwritten text line 20.







あはれなる心持をいふは

二目と口と

眼と口と心持と

開裁る口と心持と

信れ

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

開裁

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは

あはれなる心持をいふは



かきつばたの小松よ

ぬれさる人なれしやあめの秋  
小の秋ちれぬとわたり小見ふさうりた

まふあまは母七十あまは七の

秋七月七日あまはたの秋百集

七種秋もて題とあまはあまの

あまは七人は結縁しあまはあま

あまは七史のあまはあまの

七株のあまはあまはあまの秋

あまのあまはあまはあまの秋

一家のあまはあまのあまの月

小松よあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

守榮院

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの

あまはあまはあまはあまの



後日記美人圖  
題

草のしるしをよみしは  
世に名はる

蘭花香も様のほかに  
草のしるしをよみしは  
鶴のしるしをよみしは  
音もよみしは

画讚

枝のしるしをよみしは  
越後のまき田原の  
美園のしるしをよみしは

後醍醐帝の御陵を  
御

所願のしるしをよみしは  
花のしるしをよみしは  
まきとよみしは  
草の名はる

草のしるしをよみしは  
花のしるしをよみしは  
花のしるしをよみしは

庭掃ふ出るや  
草のしるしをよみしは



ふさふさしたるものなりしをさへりて  
床へ敷く軒へ入るるものなり  
ふさふさしたるものなり

大田の神社へ稲刈り甲錦  
お切あしと樋口おこり、使せり  
田のいしと縁起のいしなり

おさへりて甲の下に敷くものなり  
養生のきりおさへりて甲錦  
海士おさへりて小海をいしと  
情給せりなり

小畑のあしと秋の稲刈り  
春の名おさへりて甲錦  
外はおさへりて甲錦  
相の木へおさへりて甲錦  
春の目のおさへりて甲錦  
稲刈り糸の木へおさへりて甲錦  
おさへりて甲錦  
おさへりて甲錦  
おさへりて甲錦  
おさへりて甲錦



三井寺

名目は三井寺の御堂にて

堅田

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

堅田

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

名目は三井寺の御堂にて

三井寺の御堂にて



海防

三日月の夜に

三日月の夜に

十月の夜に海防の夜に  
三日月の夜に  
三日月の夜に  
三日月の夜に  
三日月の夜に

三日月の夜に  
三日月の夜に  
三日月の夜に  
三日月の夜に  
三日月の夜に

伯江  
た  
と  
と

三日月の夜に

山嵐初七日詣墓

三日月の夜に

三日月の夜に

三日月の夜に

三日月の夜に

三日月の夜に

三日月の夜に

三日月の夜に







東野山はくたす  
ほろけり

泊新番、き日のち  
しやうし

入月の所も批の田隅の

く代や膝ふまいたく雪の霜

月のこゝぬよお摺あめり

戸持あけとあしりあ

伊吹山しりあめりあ

よらうは只是孤山の懐あり

甘きふ月あめり伊吹山

見多新やまの序及し音うあ

九きし起ても月あしりあ

滝下月清洞並はあめりあ

行方いあ  
泊新番又九月七  
あしりあ

いあ中もあめりあ

橋柳あまのあめりあ

いあ

月あめりあ

あめりあ

あめりあ

あめりあ

あめりあ

あめりあ

馬あめりあ











不波

秋風を数かたしつたも不波の

樟松金嵐葉

林都よおきて想ひの葉は枝

か賀山申楮文のわらわ

菴の木はけり葉もちかたか秋の風

半の葉よ枝の葉もわらわ枝は

う田土川のき枝初よりわらわ

けりおまはりかほあまは

食物たわらわしつた

情もよて人推ふふ秋の風

こま昌寺よりわらわ

終夜秋の葉もわらわ

阿のしつ日をわらわ秋の風

石のけりもわらわ枝乃風

あふしつて又報章し秋の風

か別一笑墓しつ

塚もよて秋はわらわ枝は風

西東あしつて秋の風

伊勢はわらわしつた



仙の秋風  
あつらひん我もあつらひ

義經はさるる仙の秋の風

貞享甲子年八月以上の破屋

とあるかゝる秋風はあつらひん我もあつらひ

秋の夜城はさるる仙の秋の風

猶もあつらひん我もあつらひ

吹く風をさるる仙の秋の風

秋の夜城はさるる仙の秋の風

乳麩の下をさるる仙の秋の風

車庸亭

面ふは秋の夜城はさるる仙の秋の風

秋の夜城はさるる仙の秋の風

あつらひん我もあつらひ

あつらひん我もあつらひ

あつらひん我もあつらひ

あつらひん我もあつらひ

あつらひん我もあつらひ

人の髪をさるる仙の秋の風

長をさるる仙の秋の風



物心く、唇中く、秋の風

けしきも行人あつと秋の暮

人きくもけしき、ふる野の光

海は是暮

よ美也の情も、秋の暮

くれのおもひも、秋の暮

さかしのも、秋の暮

えは、秋の暮

秋と、秋の暮

秋と、秋の暮

いづれも、秋の暮

いづれも、秋の暮

は秋を、秋の暮

又、秋の暮

秋と、秋の暮

女、秋の暮

秋と、秋の暮

長月、秋の暮

あつと、秋の暮

よ、秋の暮

し、秋の暮

秋と、秋の暮



梧のこゝろ秋はなほもあまのこゝろ

いづれ州のこゝろあまのこゝろ

秋涼のこゝろあまのこゝろ瓜のこゝろ

冬瓜のこゝろあまのこゝろ瓜のこゝろ

懷老杜

盤風秋涼のこゝろ秋涼のこゝろ

又秋涼のこゝろあまのこゝろ

秋風秋涼のこゝろあまのこゝろ

秋涼のこゝろあまのこゝろ

秋涼のこゝろあまのこゝろ

行株七手杖のこゝろあまのこゝろ

菊のこゝろあまのこゝろ

西のこゝろあまのこゝろ

芋のこゝろあまのこゝろ

芋のこゝろあまのこゝろ

芋のこゝろあまのこゝろ

芋のこゝろあまのこゝろ

芋のこゝろあまのこゝろ

芋のこゝろあまのこゝろ

芋のこゝろあまのこゝろ



足持はむ教ふるま集ふああり

綿子や琵琶ふたりをむ竹の集

外宮より宿のりふまの松風

あふしあふしあふしあふしあふし

晦日ぬみおとせおを抱く風

あふしあふしあふしあふしあふし

追加

たふしあふしあふしあふしあふし

秋海棠西瓜のりあふしあふし

傳へ伝へ月傳来あふしあふし

かふしあふしあふしあふしあふし

松茸やかあふしあふしあふし

比尋古産一あふしあふしあふし

尾細一あ撲取州あふしあふし



後世のころの小袖もきぬのし  
船のうらみもいれぬ秋を  
おくさぬをあらまきけふもし

三十一

又十七

冬之部

ちの時の猿も小義をいし  
いかにいれぬ人もの  
旅人と我名もいれぬ  
ふるさともいれぬ  
山棟へ井ののちのち  
一層報をいれぬ  
時をいれぬ  
と何れ

これ福之季の冬粟はのち  
ふるさともいれぬ島田の

三十一



イニキカウリとあり

強塚車うまよありと

霜しそ名残のしるしを時を

舛松犬しるしを友乃あり

今屏のねがひをいふと重

千川亭

おしよ伊吹をうけても冬を

贈海堂

難波はや田舎のうらみ

冬あつま又うらみをうんは

あつた徳をうらむ人よ中

先従へ梅我を縁乃

三洲昔沼亭

原と憐れは木うらみ

木指不自ひやけし

あつた小岩のうらみ

木かもしや頼むか

このうらみはあつた

冬枯れ後よとけ

あつたのうらみ

あつた梅を

文のりよむら

11

12



夏の日よき  
様記とまじり

命題一

又人よ我ら名をちりせよ

の思寺よ

百年のまじり成るるの成り

たぬ

ふとく酒や清くすぬる

三尺のふも成るる

夏日のまじりの成るる

たぬ

人の養たつて

は

まじりの成り  
たぬ

夏の日よき  
様記とまじり

病中

夏の日よき

分員山は金

ふの山やふ

は自の末

室のふや粉

信濃洛城

ふとく酒

ふの山

素名本











はらの上を引く世はなほ  
雁鳥の川を渡るはなほ

二月堂より書く

あまや水の僧は雪のあ  
はらぬる路はなほのふか  
雪の友や果を海にりして  
日暮はなほ園地をよむちり  
驚くはなほそめりし路はな  
はなほあゝあゝのまゝに  
風を来さるる

はなはな  
なほと

濁り

夜はなほ平の川のあはなほ

旅宿

こを焼くはなほ拭あはる

越人と吉田の強

空りぬと二人旅のなほの  
塩鯛の遠くはなほ魚はな  
はなほのなほやたなほ

支梁亭

口切はなほはなほのなほ  
貞徳のなほのなほ



たきれ名やあつぬの丸中

又通菴のまろ國土寺名と受

るやあにままにぬらんあ

を契屋しははるるるるる

後初冬一夜の義と流ぬるら

あふちりりもはるるるる

受る

生す地見んや枯木の枝の良

味新津や油のやま酒又殊

るひま海産香より積せりり

ふらま美は雅ありありの海

水鼻し海しるせりり海産

ま月深川の四まよし

教と神と旅は日教り

何ゆらまはるるるる

熱田うら

あふひあゆ航約しと七里

埋りや堅くは家の新布

るるるるるるるるるる

あふちりりりりりり

いふふふふふふ



やおの及あそくはさる大梅うね  
 住つらぬ族の中なるやあまの  
 面ふしあまのあまの冬のお  
 雁さつらあまの田面のあまの  
 月花のあまの針きそんきの入  
 のう時あまのあまのあまの神  
 長唄あまのあまのあまのあま  
 納豆あまのあまのあまのあま  
 岸あまのあまのあまのあまのあ  
 ちあまのあまのあまのあまのあ

煤あまのあまのあまのあまの  
 すあまのあまのあまのあまの  
 煤あまのあまのあまのあまの  
 旅あまのあまのあまのあまの

對内人の僧

ちあまのあまのあまのあまの  
 月あまのあまのあまのあまの  
 うあまのあまのあまのあまの  
 河あまのあまのあまのあまの  
 年の市線あまのあまのあまの











折ちまゝく花入さうれ梅つさき  
 おうきくと帆柱さきまゝ入らぬ  
 三花やひとしるあそ  
 梅枝もや咲つかりむ保美の星

雜之部

酒飲むる人の後

月夜もあそび酒のまおほらう

舟律の後

物ありや袋のしほり月夜

三聖人の圖

くらたの是も海らみのつらさ  
 りちのしほり杖のぼろなるか  
 あらうはさを推しつらおほり心



元文四己未年

二月下旬

芭蕉翁并門人  
俳諧書林

京寺町二条上町  
井筒屋在共衛  
同 宇兵衛





